

琉球大学学術リポジトリ

ヤッピースケールからみた運動経験者の特性に関する研究

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-08-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 並河, 裕, Namikawa, Yutaka メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1352

ヤッピースケールからみた運動経験者の特性に関する研究

並 河 裕 *

Research on the Character of the Sport-Experienced Person by Yuppies Scale.

Yutaka NAMIKAWA*

ABSTRACT

The purpose of this research was to verify relation between life-style factor and the sport experience. The questionnaire were composed of an age and sex, about the sport activities experience 6 items, and 23 items related to life-style factor more. The Subjects were 132 students of the special school (66 males, 66 females).

The main results were as follows:

- 1) The significantly difference between the male and the female statistically was seen in the past sport experience. In other words, a male's past sport experience showed higher value than it of the female.
- 2) When it tried to see present sport activities conditions, a degree of participation to the sport event showed very high value. On the other hand, a degree of use of the sport facilities showed low value.
- 3) The characteristics of the life-style factor of the sport-experienced person became clear. They were first-class orientation, faith in mobility, the sport orientation, and the personalization orientation.

I はじめに

今日の社会は、目まぐるしい変化とともに人々の価値観、行動パターン等も多種多様である。そしてこのことはスポーツの分野でも同様で、人々の多様なニーズに応える生涯スポーツを推進させていくことが重要な今日的課題として認識されている。

また現在、わが国の寿命も50年から今や80年になり、この30年の生き方が重要になっている。生涯スポーツの観点からこの30年を運動としてのスポーツ、あるいは文化としてのスポーツとどのように関わっていくかが問われている。一方、最近の健康ブームに代表されるよう

に、わが国の運動実施率は67%と3人に2人が実施していると言われている。しかし、諸外国の運動実施状況と比較すると、運動の質(例えば、運動の頻度や時間)という面からみると、まだまだ低いといわざるを得ないのが現状である。

それ故に、運動の質を高めるためのスポーツ環境の整備が急務である。一方、人のスポーツや運動との関わり方は、個人的要因、社会的要因、環境的要因等によってさまざまである。つまり、個人のライフスタイルがスポーツや運動との関わりに大きな影響を及ぼすと考えられる。拙稿(1996)において、大学生を対象に運動経験者のライフスタイル要因の特性を分析した結果においていくつかの特性が明らかになった。しかし、社会学やマーケティングにおける

* 保健体育教室

ライフスタイル分析には、ミッチェルら(1987)による VALS 調査や飽戸ら(1989)による NJWL 調査、また AIO 調査といったさまざまな指標が用いられている。その中に、若者のライフスタイルをあらわす指標として用いられているものにヤッピースケールがある。これはマーケットにおけるフォアランナーとしての可能性を示すライフスタイル要因として重要と考えられ、にわかには注目を集めた。特に若者の行動原理を説明する要因として研究が進められている。個人の消費行動が意識や価値観といったライフスタイル要因に影響を受けることが、消費行動分析にライフスタイル要因が用いられる所以である。このことはスポーツ行動においても同様である。つまり、人は自分のライフスタイルに従って、スポーツに接近したりあるいは退避といった行動を起こすと考えられる。それ故にライフスタイル要因による運動者の分析はスポーツ経営にとって関心事である。

そこで本研究では、運動経験とヤッピースケールとの関連を比較分析することで、運動経験者としての若者のライフスタイル特性を明らかにすることを目的とした。

II 研究方法

1. 調査対象

沖縄市に在籍の専門学校に在籍する学生 132 名(男性 66 名、女性 66 名)を対象に質問紙法によるアンケート調査を実施した。調査票の配布および回収は、集中講義として行われている体育の授業の中で実施した。

回答が得られた対象者の性別及び年齢構成は表 1 に示した。

表 1 対象者の性別と年齢

性別	平均値	N	標準偏差
男性	20.03	66	1.11
女性	19.27	66	0.96
合計	19.65	132	1.06

2. 調査項目

調査項目は、基本的属性(年齢、性別)が 2 項目、過去の運動経験(小学校、中学校、高校)が 3

項目、現在の運動実施状況(クラブ所属の有無、スポーツ行事の参加状況、運動施設の利用状況)が 3 項目、ヤッピースケールとして 23 項目で、計 31 項目を設定した。

なお、過去の運動経験、クラブの所属の有無、さらにヤッピースケールの回答には「はい」と「いいえ」の 2 分応答で求めた。そして、運動実施状況においては 4 件法による回答を求め、スポーツ行事の参加度を「すべて参加する」を 4 点から「まったく参加しない」を 1 点とし、運動施設の利用度も同様に「よく利用する」を 4 点から「まったく利用しない」を 1 点として、それぞれ間隔尺度を構成しているものと仮定し、以下の分析に使用した。

3. 統計処理

データの分析には、統計パッケージ SPSS, Ver.10 を使用し、主にクロス集計による χ^2 検定を分析に用いた。

III 結果

1. 過去の運動経験の男女比較

小学校から高校までの運動経験に男女差があるのかどうかを見るために、運動経験と性別をクロス集計による χ^2 検定を行った。

小学校における運動経験の有無については、男子では「はい」という回答が 56.1%、「いいえ」が 43.9% で、女子においては「はい」が 37.9%、「いいえ」が 62.1% という比率であった。クロス集計による検定の結果、男子は女子に比べて小学校時の運動経験者が多いという傾向が見られた(χ^2 値 = 4.380、 $p < .05$ 、表 2 参照)。

表 2 小学校運動経験の男女比較

	運動経験小学		
	はい	いいえ	合計
男性	37	29	66
性別	56.1%	43.9%	100.0%
女性	25	41	66
	37.9%	62.1%	100.0%
合計	62	70	132
	47.0%	53.0%	100.0%

$\chi^2 = 4.360$ $p < .05$

次に、中学校における運動経験をみると、男子では「はい」が69.7%、「いいえ」が30.3%であり、女子では「はい」が32.8%、「いいえ」が67.2%という値であった。検定の結果は、男子に運動経験者が多く、女子に運動未経験者が多いという傾向を示した (χ^2 値 = 17.6999、 $p < .001$ 、表3参照)。

表3 中学校運動経験の男女比較

		運動経験中学		
		はい	いいえ	合計
性別	男性	46	20	66
		69.7%	30.3%	100.0%
性別	女性	21	43	64
		32.8%	67.2%	100.0%
合計		67	63	130
		51.5%	48.5%	100.0%

$\chi^2=17.699$ $p<.001$

さらに、高校における運動経験についてみると、男子では「はい」が56.1%、「いいえ」が43.9%で、女子では「はい」が36.9%、「いいえ」が63.9%という結果であり、男子のほうが女子に比べて運動経験者が多いという傾向を示した (χ^2 値 = 4.820、 $P < .05$ 、表4参照)。

表4 高校運動経験の男女比較

		運動経験高校		
		はい	いいえ	合計
性別	男性	37	29	66
		56.1%	43.9%	100.0%
性別	女性	24	41	65
		36.9%	63.1%	100.0%
合計		61	70	131
		46.6%	53.4%	100.0%

$\chi^2=4.820$ $p<.05$

このように、小学校から高校にいたるまでの運動経験の有無に関しては、すべての校種において、男子の運動経験者の比率が女子のそれを上回っているという結果であった。

2. 現在の運動実施状況について

1) 運動クラブの所属状況

現在、運動クラブに所属しているものの状況は、全体では所属者が15.2%、無所属者が84.8%であった。男女別にしてみると、男子の所属者が27.3%、無所属者は72.7%であり、女子は、それぞれ3.0%、97.0%であった。男女間には統計的に有意な差が認められ、男子の所属率は女子に比較して有意に高いという結果であった (χ^2 値 = 15.086、 $p < .001$ 、表5参照)。

表5 現在の運動経験の男女比較

		現在の運動経験		
		はい	いいえ	合計
性別	男性	18	48	66
		27.3%	72.7%	100.0%
性別	女性	2	64	66
		3.0%	97.0%	100.0%
合計		20	112	132
		15.2%	84.8%	100.0%

$\chi^2=15.086$ $p<.001$

2) スポーツ行事への参加度

スポーツ行事への参加状況についてみると、「全く参加しない」が6.8%、「ほとんど参加しない」が9.8%であり、「たまに参加する」が33.1%、「すべて参加する」が49.6%という結果であった。全体の8割がスポーツ行事に参加している状況がみられた。なお、検定の結果、男女間に有意な差は認められなかった。

3) 運動施設の利用度

運動施設の利用状況についてみると、「よく利用する」と「たまに利用すると」を合わせ

表6 運動施設利用度の男女比較

		運動施設の利用度		合計
		利用しない	利用する	
性別	男性	51	15	66
		77.3%	22.7%	100.0%
性別	女性	58	6	64
		90.6%	9.4%	100.0%
合計		109	21	130
		83.8%	16.2%	100.0%

$\chi^2=4.277$ $p<.05$

ると16.1%であり、「全く利用しない」と「ほとんど利用しない」を合わせると83.8%であった。男女間には有意な差が認められ、男子のほうが女子に比べ運動施設の利用率が高いという傾向が見られた(χ^2 値=4.277、 $p<.05$ 、表6参照)。

3. ヤッピースケールからみた運動経験者の特性

ヤッピーはアメリカで生まれ、マーケット分析の分野で注目されている。実際のヤッピーといわれる対象者は、年齢は25歳から45歳で、主要都市あるいは都市近郊に住み、栄光、威信、知名度、名声、社会的地位、権力等といったものを生涯の目的とする人たちを示す(中野、1984)。鮑戸(1986)は日本的ヤッピー分析の中で、日本にもかなりヤッピーと似たライフスタイルを持った人々、ヤッピーと似た価値を志向する人々の存在を指摘している。

今回は、純粋のヤッピーというよりは、ヤッピー予備軍としての年齢層をターゲットに、ヤッピースケールに用いられている要因と運動経験との関連を検討することとした。

ヤッピースケールは下位尺度としての「個性化志向」、「本物志向」、「銘柄志向」、「スポーツ志向」、「モビリティ志向」、「一流志向」、「立身出世志向」といった7つの尺度で構成されている。また、各尺度はさらにいくつかの項目で構成されている。本研究においては、各項目ごとに、「はい」に1点、「いいえ」に0点を仮に与え、下位尺度ごとの総得点を算出した。さらに、小学校から現在の運動経験に至るまでの、各校種別に運動経験あり群となし群ごとに下位尺度の平均値を算出し、平均値による差の検定を行った。

表7はヤッピースケールに用いられる各下位尺度の平均値及び各校種別の運動経験者と未経験者との比較検定の結果を示したものである。各下位尺度の平均値にはばらつきが見られるが、最も高いものが「スポーツ志向」の2.09という値であり、最も低いものが「一流志向」の0.19という値であった。

まず、小学校における運動経験者と未経験者を下位尺度ごとに平均値で比較した結果、「ス

ポーツ志向」に有意差が認められた。運動経験者が未経験者に比べて「スポーツ志向」の得点が高いという結果であった。同様に、中学校での運動経験者と未経験者の比較においては、「個性化志向」と「スポーツ志向」に有意な差が認められた。運動経験者は未経験者に比べ、「個性化志向」と「スポーツ志向」において有意に高い値を示した。さらに、高校においては、「個性化志向」と「本物志向」及び「スポーツ志向」と「立身出世志向」において、すべて運動経験者が未経験者よりも有意に高い値を示すという傾向が見られた。現在の運動部所属と各尺度との比較においては、「個性化志向」と「スポーツ志向」及び「モビリティ信仰」と「立身出世志向」に、それぞれ統計的に有意な差が認められた。運動経験者の得点が未経験者のそれに比べ、高い傾向が認められた。

このように、各校種ごとに違いが見られるが、ヤッピースケールから見た運動経験者のライフスタイル的要因の特性がいくつか見られた。

IV 考察

1. 過去の運動経験について

小学校から高校までの運動経験者の比率を見ても、中学校の51.5%が最も高く、小学校および高校においても約半数のものが経験しているという結果からは、比較的学校生活における運動実施状況は良好であるとみることができる。ただ、男女別に比較した場合、明らかに有意な差が見られる。つまり女子の運動経験者が男子に比べてまだまだ少ないということ、このことは小学校から高校にいたるまで一貫して認められることなどが明らかである。

2. 現在の運動実施状況について

現在の運動部所属率は全体で15.2%であり、小学校から高校のそれと比較しても非常に低いと考えられる。この背景には対象者とした専門学校生の特性、つまり短期間における集中学習(資格の取得等)による自由時間の少なさ、あるいは学校のスポーツ環境の未整備等が考えられる。

表7 ヤッピー尺度と運動経験の比較

		各校種別運動経験とヤッピー尺度との比較検定								
下位	ヤッピー尺度の項目	全体の 平均値	小学校		中学校		高校		現在の運動部	
尺度			平均	検定	平均	検定	平均	検定	平均	検定
個性化志向	他の人とは、一味違う個性的な生き方をしている。	1.09	1.20		1.32	*	1.39	*	1.55	*
	平均的日本人とは、ちよつと違う生活の仕方をしている。		0.98		0.84		0.83		1.00	
	グループのなかで、注目的になりたい。									
	洋服などを買うとき、わりに目立つものを買う方だ。									
本物志向	昔と同じような生活の仕方をするのは面白くない。									
	インスタント食品は食べない。	0.41	0.49		0.40		0.54	*	0.45	
	着るものはできるだけ天然繊維のものにしている。		0.34		0.40		0.29		0.40	
銘柄志向	家の中や部屋に観葉植物などをつもおいている。									
	ファッションのためにかけるお金や時間は惜しくない。	0.56	0.57		0.56		0.63		0.45	
	自分を表現する手段として、ファッションを重視する。		0.55		0.53		0.49		0.58	
スポーツ志向	皆が認めるセンスのよい銘柄品を身につけていないとなんとなく曇々とふるまえない。									
	スポーツで丈夫な身体づくりに励んでいる。	2.09	2.46	*	2.68	*	2.80	*	3.45	*
	スポーツで疲れた神経をスカッとさせる。		1.75		1.48		1.50		1.84	
	月に何回かはスポーツや趣味のことをしている。									
モビリティ信仰	好きでよくするスポーツや趣味がある。									
	早い機会に、世に知られた一かどの人物になりたい。	1.76	1.79		1.79		1.90		2.15	*
	今の世の中、努力すれば成功できる。		1.74		1.75		1.66		1.69	
一流志向	今の世の中、智慧を備かせれば成功の機会はいくらでもある。									
	現在では世間のしきみができあがっていて、普通の人が努力したからといって成功はおぼつかない。									
	服装や装身具は、一流名柄のものを見につける。	0.19	0.17		0.23		0.26		0.20	
立身出世志向	名もない銘柄のものやイメージーションなどは、はずかしくて身につけられない。		0.21		0.15		0.14		0.19	
	出世するためには、あらゆる努力を惜しまない。	1.62	1.66		1.77		1.86	*	2.15	*
	同じ一生なら、少々苦勞をしても成功者になりたい。		1.58		1.48		1.42		1.53	

注) 上段の数値は運動経験有りの平均値、下段は未経験者の平均値 *印は5%水準で有意差有り

一方、スポーツ行事等の参加率は非常に高く、「たまに参加する」と「すべて参加する」を合わせると82.7%であった。スポーツ行事の質や量的な背景は異なるが、大学生を対象とした調査結果(31.6%)と比較しても、非常に高い参加率といえる。一般的に専門学校における学生の行動は、学生数の規模から見ても、集団行動をとることが多く、このことがスポーツ行事への参加率を高めていると考えられる。

しかし、運動施設の利用度から運動実施状況を見てみると、反対に利用状況は非常に悪く、「たまに利用する」と「よく利用する」を合わせても16.1%である。この背景にはおそらくスポーツ施設の少なさや時間的余裕のなさといった要因が関わっているものと推測される。

3. ヤッピースケールから見た運動経験者の特性

小学校から中学校、さらに高校と現在に至るまで一貫して、運動経験者に見られた特性は、「スポーツ志向」のみであった。中学校になると「個性化志向」が加わり、高校では、それに「本物志向」と「立身出世志向」が加わる。さらに現在の運動状況においては「本物志向」が消え「モビリティ信仰」が現れるといった図式が見られる。これらのことは、スポーツをする目的と関連させて考えると理解しやすいと思われる。すなわち、スポーツをすることが好きといった、スポーツそのものの魅力が「スポーツ志向」の高さを表し、中学の段階では「個性化志向」というものがスポーツの実施と関連して表出し、さらに高校や現在にいたると「立身出世志向」や「モビリティ信仰」が表出してくるのではないかと推測される。このことは、推測の域を出ないが、あながち関係がないとは思えない。年齢が進むにつれ、また運動経験を増すことにより、各ライフスタイル要因間に運動経験者と未経験者に差ができるようになることが推測される。以上のことから年齢や社会的背景による影響は無視できないが、少なくとも、ヤッピースケールからみた運動経験者の特性は明らかにできたと考える。今後はこの特性をいかにスポーツ環境の整備、あるいはスポーツマネジメントに活かすかが重要な課題である。

V まとめ

運動経験とヤッピースケールとの関連を比較検討することにより、若者のライフスタイル特性を明らかにする為に、専門学校生を対象にアンケート調査を実施した。主な結果は以下の通りである。

1. 過去の運動経験には男女差が認められ、小学校から高校現在にいたるまで女子の運動経験者が男子に比べ少ないことが確認された。
2. 現在の運動クラブ所属率は全体に低く、その中でも男女差が見られ、女子のほうが男子と比較して所属率が低いという結果であった。また、スポーツ行事への参加度は全体に高く、男女共に8割が参加しているという状況であった。さらに、運動施設の利用状況においては、全体に利用度は低く、女子のそれは男子に比べ有意に低いという傾向を示した。これらのことから、スポーツ環境の整備とりわけ運動施設の拡充が課題であると考えられる。
3. ヤッピースケールから見た運動経験者の特性がいくつか見られた。小学校から現在に到るまで一貫して、運動経験者が未経験者に比べ「スポーツ志向」が高いという傾向が認められた。「個性化志向」が中学校から運動経験者の特性として見られるようになり、高校及び現在において、「立身出世志向」及び「モビリティ信仰」、さらに「一流志向」が運動経験の増大に伴い、高くなることが確認された。

参考文献 (Reference)

- 荒井貞光 (1982) 現代人のスポーツ行動に関するスポーツ社会学的分析と考察～成人のスポーツ集団参加の分析から～. 広島大学総合科学部紀要Ⅱ 社会文化研究 8: pp. 165-201.
- 鮑戸弘 (1986) 日本的ヤッピーの実証的研究. 消費と流通 10 (2): pp13-32.
- 鮑戸弘・松田義幸 (1989) ゆとり時代のライフスタイル. 日本経済新聞社: 東京, pp. 39-50
- 久保良敏・長町三生・片岡晃 (1977) 現在学生のラ

並河：ヤッピースケールからみた運動経験者の比較分析

イフスタイルに関する研究. 実験社会心理学研究
17 (1) : pp. 60 - 73.
中野次郎訳 (1984) ヤッピーハンドブック. ダイア
モンド社
並河裕 (1996) ライフスタイル要因から見た運動経
験者に関する研究～過去の運動経験とライフス

タイル要因との比較～. 琉球大学教育学部紀要
48 : pp. 303-313.
ミッチェル・吉福伸逸監訳 (1987) パラダイム・シ
フト～価値とライフスタイルの変動期を捉える
VALS 類型論～. TBS ブリタニカ.